

人類愛と芸術に生きた ロマン・ロラン (I)

島野 盛郎

ブルゴーニュを愛した作家たち (3)

ロマン・ロラン (Romain Rolland) の名は日本人にも広く親しまれている。『ジャン・クリストフ』(1904～12)、『魅せられたる魂』(1922～33)の二大長編小説をはじめ、そのほとんどの作品が、早くから日本で翻訳され、読者に大きな感銘を与え続けているからである。

ロマン・ロランはフランスを代表するというより、世界的な作家であり、その国際主義と民衆愛と反戦思想を盛った作品の数々は、いまでも世界中の人びとに共鳴され続けてやまない。

このロマン・ロランはブルゴーニュ出身である。1866年1月29日、ブルゴーニュ地方の北東の小さな町・クラムシーに生まれ、1944年の暮、同じブルゴーニュ地方の中世の教会と丘の町ヴェズレーで死んだ。

その78年の生涯は、大きな人類愛の精神と音楽に培われた芸術的な魂で貫かれている。これから2回にわたってロマン・ロランの偉大な魂に触れてみることにしたい……。

トルストイの言葉に感動

ロマン・ロランの生家は、数世紀来、ブルゴーニュの地に住みついた旧家で、代々公証人をつとめ、父は五代目の公証人であった。母もこの地方の名家の出で、カトリックの信仰に厚く、やさしい人柄で音楽に対してすぐれた理解力を持つ女性であった。幼い頃のロランの何よりの喜びは、母が弾いてくれ、ときには手を取って教えてくれたピアノと、家の近くの聖マルタン寺院が鳴らす鐘の音であった。

故郷のクラムシーで初等教育を終えたロランはパリに出、ルイ・ル・グラン中学に学んだ。中学を卒業すると最高学府である高等師範学校を受験、2度失敗したのち、1886年宿願かなって合格した。以来3年間の学生生活は、学問、読書、交友などにより、ロランを大きく成長させる。

なかでも深く影響を受けたのは、トルストイの作品であった。ロランは感激の余りトルストイに2度にわたって手紙を出した。その返事には「芸術家としての真の条件は、芸術に対する愛でなくて、人類に対する愛である」という言葉があり、感動した。その教えはロランの将来の決定的な指針となった。

1889年、同校を卒業。歴史学の教授資格をとり、さらに留学生に選ばれて、ローマに滞在した。

ローマでは革命的な思想を抱いているため祖国ドイツを追われた老婦人、マルヴィタ・フォン・マイゼンブークと親交を結んだ。彼女はワグナーやニーチェの友人であり、ドイツの偉大な芸術家、ゲーテやベートーベンのことをロランに教えた。彼女の暖かい友情に包まれて、ロランは理想主義的なドイツの心を学んだ。のちに『ベートーベンの生涯』(1903)を中心とする音楽家の伝記研究や音楽批評は彼女の影響からスタートしたものである。ロランは、このローマ滞在中に『ジャン・クリストフ』の構想が、おぼろげながら浮かんでくる。それは日暮れ時、ジャンニコの丘から見渡した風景が、いかにも調和にみちているので、分裂したヨーロッパ諸国民も、この風景のように融合することができないものかと感じたことがそもそものきっかけとなったからである。

ローマ留学を終え、パリに戻ったロランは母校高等師範学校の教授として歴史学の講座を担当、ついでソルボンヌ大学の音楽史の講座も受けもった。1895年には『近代抒情劇の起源』で文学博士の学位もとる。同時に数多くの戯曲や小説や伝記の力作を発表し、その文学的地位を着々と固めていく。だが、家庭生活は不幸であった。1892年、言語学教授の娘、クロチルドと結婚したが、孤独癖の強いロランと社交好きの妻との間はしっくりいかず、ついに1901年、離婚するのである。

『ジャン・クリストフ』は離婚の2年後、1903年7月に筆を起し、1912年6月に書き上げられている。その間、10年の歳月が経過しているが、その10年はロランにとって孤独と苦悩の生活の連続であった。妻と別れてモンパルナスのわびしい住居に移った彼は大学教授としての職務や研究その他の雑事に忙殺されながら、『ジャン・クリストフ』を書き上げることを唯一の生き甲斐として日々を過ごした。

その甲斐あって『ジャン・クリストフ』は画期的なすばらしい作品となった。いわゆる大河小説の先駆をなし、フランス文学史上、きわめてまれな理想主義的な作品としての金字塔を樹立したのである。

『ジャン・クリストフ』でノーベル文学賞
『ジャン・クリストフ』(全10巻)は、全作が交



ロマン・ロラン

壮年期のクリストフのパリにおける生活とその環境、(3)主人公の生涯の完成期、がそれである。

ジャン・クリストフ・クラフトはドイツのライン河畔の小都市に生まれ、少年時代から生活の試練を受け、青年時代にパリに出、音楽家となり、いろいろの苦勞をする。その性格や育った環境はベートーベンに似ている。しかし、ベートーベン的ではあるが、20世紀前半の時代を生き抜く自主的存在として描かれている点がちがっている。この力強い創作力と豊かな人間性をもつドイツ人クリストフはフランス人オリヴィエと親友になる。そして本当のフランス精神を理解することによって思想と仕事を成熟させる。晩年イタリアにゆき、女友達グラチアとの友情を通してイタリアの調和の美を体験する。こうして彼の精神と仕事とは、力と理性と調和との総合を実現することになる。それは全ヨーロッパの協調という作者の理想の姿であった。

〈あけぼの〉、〈朝〉、〈青春〉と続く10巻のこの物語には全篇に音楽のリズムが川のようにながれている。そして最後に、〈生に栄あれ！死に栄あれ！〉という賛歌となって魂の大洋の中に流れこむのである。

現代フランス文学の権威で、早大名誉教授・新庄嘉章は、こう評論している。

「この作品は一つの魂の生成発展の物語であるが、同時に鋭い文明批評を含んだ大規模な社会小説でもあり、また、ヨーロッパ各国の精神力を糾合し調和させて、一種のヨーロッパ共和国を築きたいと夢みていた、ロランの理想を盛った作品でもある。第一次世界大戦の脅威がひしひしと迫ってくる重苦しい前夜に、クリストフはドイツとフランス両国民の和合を力説した。だが現実には、両国はついに不幸にも戦いをまじえ、相互に文明破壊の惨禍をもたらした。しかしロランのこの悲痛な叫びは、フランスとドイツの、いや世界各国の良心ある人びとの胸に深い余韻を残したことは否みがたい事実である」

『ジャン・クリストフ』は「文章によって描かれたすぐれた音楽小説」との評価を受け、1913年にアカデミー大賞を1915年にノーベル文学賞を受賞した。

1914年7月に第一次世界大戦がはじまると、フランスではドイツに対する憎悪の感情が昂まり、熱烈な愛国主義の風潮が支配した。しかし、ロランは絶対平和主義の立場から戦争に反対し続けた。そのため一部のフランス国民から親独的であると非難され、中立国のスイスへ亡命せざるを得なくなった。スイスでのロランはあくまで自分の信念を忠実に守り平和主義をつらぬいた。ノーベル文学賞を授与されると、その賞金全部を赤十字社と社会事業団に寄付した。

そして戦争反対の文章を発表し続けた。「狂気にとらえられた人びとの中で生き、文明の破滅に立ち会って、しかも無力であるということは恐るべきことである。このヨーロッパ戦争は最も由々しい、歴史の破局であり、人類の友愛によせるわれわれの希望の瓦解である」といった調子が一貫して流れている。

これら戦争反対を主張した文章は『騒乱を超えて』（1915）、『先駆者たち』（1919）などに収められている。

第一次世界大戦後は以前にまして社会問題に強い関心を持つようになった。1921年、フランスに戻っていたロランは、再びスイスに行く。そして静かなレマン湖畔の山荘で瞑想生活に入った。この頃のロランはインドのガンジーの思想に強くひかれた。インド民衆の独立運動を指導しているこの無抵抗主義者の中に、ロランは個人の精神の偉大さを見いだしたのであった。

やがてロラン第二の長編『魅せられたる魂』（1922～33）の執筆にとりかかった。

『魅せられたる魂』は女主人公アンネット・リ



ロランの生家

ヴィエールの良心的な魂の血みどろな苦闘史である。アンネットはあくまで自我の自由を失うまいとして安易な幸福を拒否し、多難な人生に飛び込んでゆく。そして幾多の人生経験から、自我愛から母性愛へ、さらに自我的な母性愛は人類的な大きな母性愛へと拡大してゆくのである。物語の前半ではアンネットは恋愛や生活のために苦闘する女性として描かれ、後半では、反ファシズムの闘争に身を投じた愛児を見守る悩める母として描かれている。1926年頃から国際的ファシズムが台頭するようになって、ロランの思想もしだいに変わってきた。それまではガンジーの非暴力の立場を支持し、ソ連の戦間的共産主義に批判的であったが、反ファシズム運動のためには、それをも認めるようになってきた。その思想の変化が『魅せられたる魂』の中にはっきりと現われている。

この小説が完成するまでの時期はロランにとって最も試練に満ちていた。すなわち、この小説にはインドの無抵抗主義とソ連の革命主義との調和を見出そうとするロランの思想的遍歴の苦悩が形象化されているからである。

ともあれ、『ジャン・クリストフ』と『魅せられたる魂』によって、ロランは永遠に世界中の人びとから愛される作家となったのである。（つづく）

島野 盛郎 / しまの・もりお

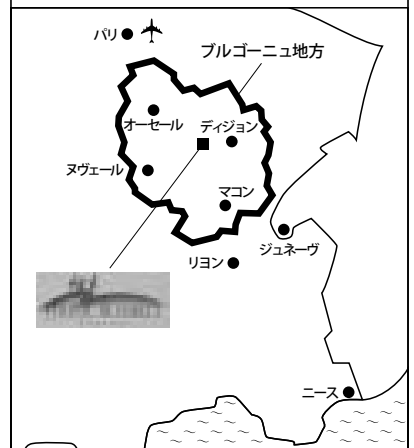
1932年生まれ。早稲田大学第一文学部仏文科卒業。54年、ダイヤモンド社入社。雑誌記者、出版局デスク等を勤め、現在、フリーライター。「伝記研究会」幹事。主な著書に『夢の中に君がいる―越路吹雪物語』（白水社）、『食を創造した男たち』（ダイヤモンド社）などがある。



Château de Chailly / シャトー・ドウ・シャイイ

ブルゴーニュへようこそ。

中世がいまだに息づいているブルゴーニュにいらっしやいませんか？数々の銘酒を生み出すぶどう畑、グルメレストランの数々、中世そのままの街並、美しく広がる大地や、小さな村々、豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、それがブルゴーニュです。



お問い合わせ↓

(株)佐多商会ヴィタリテ事業部 担当：岩沢
Tel. 03 3582 5087